

するものであるが、そもそも作中において主要人物の全ての儀礼が語られているわけではない。例えば、光源氏は作中において産養は語られておらず、また光源氏の子（表向きは桐壺帝の子）冷泉帝や、一人娘である明石の姫君（後の明石の中宮）も産養は語られない。（五五七頁）これらは意図的に語られないのであり、むしろ語られないことが、作中世界において大きな意味を持つていることに気づく。また語られている場面もそれぞれの抱える事情が反映された描かれ方が多く、それは作品が示すそれぞれの人物を描く際の方法であることがわかる。このようにして通過儀礼が語られることと語られないことから、『源氏物語』の主題を浮き彫りにしている。

さらに、巻末資料として『源氏物語』人生儀礼歌一覽——付・八代集にみる参考歌』が掲載されている。こちらにも、『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎）に収載されている『源氏物語』通過儀礼一覽』を基礎とするものであるという。項目は、左記の通りである。

生誕
成人

婚姻

賀

出家・葬送

『源氏物語』作中の儀礼歌を分類し、八代集からそれぞれの儀礼に関して詠まれた和歌が参考歌として併記されている。各項目に三首程度の参考歌があげられており、『源氏物語』の儀礼歌と比較しながら、儀礼歌に用いられる歌語や表現などの特徴に析れることができる。

本書は、『源氏物語』において語られる儀礼の描写が意味するものと、その描写の中で詠まれている儀礼歌について丹念に分析されている。諸論が儀礼に軸をおいて『源氏物語』を論証しているため、通読することにより、儀礼の意味や儀礼がどのように語られているのか、さらには作品世界の全体像及び骨格が浮かび上がってくる。ぜひ多くの方に読んでいただきたい。（二〇一〇年一〇月・武蔵野書院・A五判・上製函入・八〇六頁・本体一八、九〇〇円）
（おたけあかり 大学院前期課程在学学生）

小嶋菜温子・倉田実・服藤早苗編

『王朝びとの生活誌』

——『源氏物語』の時代と心性』

泉屋 咲月

『源氏物語』を読み解くには、その時代背景や当時の人々の精神的傾向をふまえることが不可欠である。本書は、多角的な討究によって、王朝時代における、現代とは違った社会事情やそこにおける心の実態を詳らかにすることを目的とするものである。以下に概略を記す。

王朝びとの生活誌へ―序にかえて

王朝の生活誌をどうとらえるか―歴史と想像力の交差する場へ―座談会（小嶋菜温子、倉田実、服藤早苗）

I 宮廷空間とジェンダー

童女御覽の成立と変容―平安王朝五節儀のジェンダー眼差し 服藤早苗

『源氏物語』の後宮と密通 高橋亨

王朝の時代と女性の文学―日本と朝鮮の場合 李愛淑

II 恋愛と結婚

平安貴族の求婚事情―懸想文の「言い初め」という儀礼作法 倉田実

『源氏物語』の結婚と儀礼―古注釈を手がかりに 青木慎一

夫妻の情景―『源氏物語絵巻』夕霧段、御法段を中心に 稲本万里子

III 宴の文化と政治

『源氏物語』と催馬楽―ハレの時空から恋愛・結婚まで 小嶋菜温子

『源氏物語』における酒宴と和歌―「少女」巻行幸の酒宴を中心に 長谷川範彰

曲水宴の政治文化 戸川点

IV 占いと信仰

『源氏物語』と物忌 水口幹記

『蜻蛉日記』の火災記事と火災占 深澤暉

藤壺と法華八講―「竜女」のゆくえ 袴田光康

あとがき 服藤早苗

「I 宮廷空間とジェンダー」は、序でも述べられている通り、「五節舞姫とジェンダー・後宮と密通物語・李氏朝鮮王朝の女性語りなどの視座からの考察」となっている。例えば、服藤早苗氏は「童女御覧の成立と変容―平安王朝五節儀のジェンダー眼差し」において、史料に即して童女御覧の実態を明らかにし、貴族女性の生活誌として「男性貴族の視線にさらされる女性たち、とりわけ弱者の童女たちへの非対称なジェンダー構造の構築過程」について検討している。服藤氏は、童女御覧が「あくまで遊興」であったこと、時代が下るにつれて装束が華美になっていったこと、童女は女房と同じ階級から選ばれたことを指摘している。そして、童女・下仕を見ることで、天皇や院、上層貴族は「権威を誇示」し、彼らは「見る行為」を通して「女の身体を欲望」し「現実を幻視」するために、彼らの「許容範囲」の女性たちが必要とされたのだと述べている。貴族女性の生活誌の一部として、権力者の権威誇示の道具として

見られ欲望されるという「非対称なジェンダー」が構築されたことを指摘するのである。

「II 恋愛と結婚」は、「平安朝の求婚の儀礼作法・古注釈からみた『源氏物語』の結婚・源氏絵における夫と妻などの視点からの考察」となっている。その例として、青木慎一氏の『源氏物語』の結婚と儀礼―古注釈を手がかりに」を挙げる。青木氏は、夕霧の結婚において、古注が引歌の機能に注視していることを指摘し、史実が投影される光源氏や薫の物語とは違い、心中思惟や和歌といった「物語の内的要因にしたがって展開される」一点に夕霧の結婚の独自性を見出している。さらに、夕霧の「表舞台で活動し、罪や憂いを切り離れた場を構築できる側面」を指摘し、光源氏や薫の物語と比して「歴史性から遠く創世」されているために、「夕霧の物語は王朝びとの生活の一面面を生き活きと浮かび上がらせることができた」のだと述べた。このことは、座談会において小嶋氏が述べる「個人的な領域としての文学」とも関連してくるだろう。

「III 宴の文化と政治」は、「宴と催馬

楽・酒宴と和歌・曲水宴の政治性といった視座からの考察」である。例えば、小嶋菜温子氏は、引き歌や引詩と同様に、催馬楽が単なる表現上の技法に留まらず、物語の展開や主題に関わることを指摘する。そして、藤裏葉巻の夕霧と雲居雁の結婚について、「葦垣」「河口」の引用の「性的ニュアンス」が二人の心情・恋の成就への喜びを描写するのに効果的であるとす。また、常夏巻の催馬楽引用について、巻頭で「我家」を媒介として象られる「夕霧と雲居雁の「抑圧された性愛関係」が、光源氏と玉鬘という同じく「抑圧された性愛関係」の二人のやりとりによってさらに「象られる」という「二重構造」を指摘している。そして、この常夏巻における「抑圧」によって、藤裏葉巻の大団円がより一層活きてくるのだと述べている。夕霧と雲居雁の結婚という、同じテーマに言及しつつも、「II 恋愛と結婚」における青木氏の論稿とは異なった視点からの示唆があり、こういった点にも本書の意義が見いだせよう。

水口幹記氏の「『源氏物語』と物忌」を例として挙げる。水口氏は、宇治十帖において物忌が口実として多用されることを『源氏物語』において物忌が軽んじられているとする従来の説に対して、史実を多く挙げながら新たな見識を示している。水口氏は、宇治十帖において物忌が「口実として成立する」ということは、すなわち『源氏物語』において「物忌に関する当時の正当な認識」が根づいたということであり、だからこそ、「物語の舞台装置」として成立しえたのだと述べた。また、史実と比して手続きが省略されている箇所については、むしろ「口実としての軽みを与えている」のだと指摘している。そして、物忌を口実として使うにあたっての登場人物間での差異とその人物造型の差異を見出すという新たな読みを提示する。このように、作者は「あえて物忌を口実として利用する」ことで、登場人物の印象を書き分けているのだと述べた。

以上全部で4名の論稿を例として挙げたが、本書では、文学と歴史の両面から相互的な検討がされており、『源氏物語』の時代背景やそこでの人々の心の有り様について、まことに示唆に富んだものとなっている。また、先に挙げた4例以外の論稿も含め本書において全体に共通しているのは、それぞれの内容に即した研究史がまとめられているということである。テーマごとに研究史を概観できるため、多角的なアプローチによる新たな知見を示すと同時に、『源氏物語』と深い関わりがなくとも読みやすいものとなっているのである。従来の王朝の生活誌研究をより発展させたものとなっている本書は、『源氏物語』を読み解くにあたり大変意義深いものであることはさることながら、序でも述べられているように、平安朝の生活誌を我々の生きる現代に敷衍した問題として捉える上でも重視すべき一冊だと言えよう。

(二〇一三年三月 森話社 B6判 三四七頁 三一〇〇円)

(いずみやさつき 大学院前期課程在學生)